高津区おはなしアーカイブ

●飯島　悠光（いいじま　ひろみつ）さん

昭和２０年生まれ　６８歳

川市高津区二子在住

◆ご自身のプロフィールを

生まれも育ちも二子のこの家です。幼稚園から洗足学園に通園して、小学校3年のときに新設された文教小学校に転校しました。その後、受験して中学から一貫校で学び、大学卒業から二年後にこの店「総合金物・飯島商店」を継ぎました。小学校3年のときに父が亡くなっていたので、母は大変だったと思います。

店を継ぐにあたり、見聞を広げるために大阪で働こうと思い、川崎の商工会議所で紹介状を書いてもらしました。それを持って、金物を扱っている大手の商社を訪ね、1年半勤めました。

大阪弁がきついなあと感じましたが、慣れてしまえば同じ人間なんだと思いました。入社して、3日目には、積荷をしたトラックを運転したのですが、交通違反で捕まりました。道もよくわからない上に、当時の御堂筋が珍しい4車線一方通行で、逆走したのです。

それでも、どんどん現場に出て働き、大型スーパーにセールスしたり、遠くは姫路まで営業に行きましたよ。この1年半は本当に貴重でした。人に使われないと、使われた人の気持ちはわからないと思いました。私の長男も今、一緒に仕事をしていますが、やはり、いったんは外で修行しました。その道で「飯が食べれるかどうかを見極める」のは大切ですね。

３４歳の頃に子ども会会長を4年務め、現在は第2町内会長を務めています。

◆その「飯島商店」の歴史をお聞かせください

飯島家の二男であった私の祖父は、明治３１年、多摩区の長尾からこの二子にきて居を構えたと聞いています。その理由は、この辺は多摩川の水が一部流れて沼地になっていて、商売をするのに、土地が安かったからだそうです。多摩川の水の関係から、酒造メーカーなどもあったと聞いてます。

祖父はここで、よろず金物屋としてスタートしました。いわゆる、金物をはじめ米や味噌など何でも扱うような店です。子ども時代はこの辺はほとんど田んぼで、農家を相手にしていましたので、鋤(すき)や鍬(くわ)なども扱っていました。当時は、精米所も近くにあったそうです。そのうち、大正時代になると、専門の職人さんを相手に金物を売りました。特に二子通りには、家を建てる専門の職人が集まってきました。なぜなら、1人の大工の棟梁の下に屋根屋、ガラス屋などが集まってきますからね。この近くの大亀工務店もお祖父さんの代からやっています。いまだに材木屋さん

も、マンションの裏になってしまいましたが、ありますよ。

商売関係の人とはまだ地域で付き合いはありますが、勤め人になってしまうと昼間会えないので、なかなかコミュニケーションは難しいですね。

若いときには、商・工業の若手が集まって高津青年会議を作り、地域で活発に活動していました。高津区民祭も青年会議が主催していました。青年会議は、４０歳定年ですが、最近は、青年会議のメンバーも少なくなっているため、ＯＢと現役が一緒に活動することも珍しくありません。

◆特徴あるこの商店の建物は

この店は、関東大震災後の大正１４年頃に、吉崎建設の先々代に建ててもらいました。合掌作りで、もう８５年くらい経ってますが、３・１１の大地震のときもびくともしませんでした。裏の建物の部屋のほうは、棚が倒れて大変でした。

この屋根は瓦のように見えますが、トタンです。梁などは古材を削り直して使ったそうです。その後一度、ニスを塗っただけです。

２階は昔は倉庫で、荷物をたくさん積んでました。自分の代で全部、部屋の通り側をガラスのサッシにして明るくしました。

商売上、鉄を扱うのでサビのために湿気は禁物、空調の関係で冷暖房はありません。さすがに冬は、お客さんのために暖房だけはつけますが、夏はとにかく大変です。そして、やはりお客さんのために一階の店のドアはいつもオープンにしてます。他にも木造の建物が２、３軒ありましたが、今はそこは駐車場にしています。

◆お店の前に置いてあるシンボルの大きな釜の由来は

戦前の昭和１８年に、鍋や釜の宣伝用に５００キログラムの鋳物で作ったそうです。その後、戦争の金属類没収で供出しました。戦争が終わって昭和２３年頃に、先代がまた同じ物を宣伝用に作りました。大きいといっても、実際にあの大きさの釜はそれなりに竈を作り、使われていたんです。染物屋が、染色をしたり、醤油屋が大豆を煮たり、その他、クリーニング屋、はては野戦病院が手術用のメスを煮沸消毒に使ったそうです。

私はが子どもの頃に防火用水として使われており、そこでよく遊びました。

最初は、フタがなかったのですが、今のように鉄板でフタをしてからは１５年以上になりますでしょうか。

〔※　釜の前の立て札には、７８年のＮＨＫドラマ「黄金の日々」で石川五右衛門の釜茹でシーンに使われたとある〕。

◆当時のご家族の様子は

店は、毎日朝６時から夜９時までで、休めるのは盆と正月くらいでした。大晦日でも紅白歌合戦が終わるごろにやっと親が店から上がってきました。

朝昼晩と食事を作ってくれるお手伝いさんがいて、親と食べたことはありませんでした。自分には、２人の妹と弟が１人いますが、私達と従業員達とは、別の食卓でした。それが当たり前だと思っていました。自分達４人は個性も違うし、それぞれ思い思いに淡々と過ごしていました。あまり一緒に遊んだ記憶はないですね。

商売人の子たちと友だちでしたから、皆、周りの環境も同じでした。新設の小学校に転校しても、友だちもまた一緒だったので、違和感はなかったですね。

◆どんな小学校時代を過ごされましたか

高津駅は昔、田んぼの中のひらばにあり、溝の口駅まで1駅でしたから、幼稚園児と言えども、一人で通っていました。ここから、向こうの溝の口駅が見えましたよ。電車通園は自分だけではなく、南武線で通ってくる子もいましたよ。溝の口駅前には、蓮の池があり、皆で膝までドロドロに浸かって遊び、駅員さんに「汚いかっこうで乗るな」とよく怒られました。

昭和２４年くらいに、新設された文教小学校の３年生として転校、この学校の第1期生になります。この小学校は、３０年間くらい存続しましたが、本校との統合で閉校となりました。場所は現在、市立図書館となっている所です。。

新設校でしたから、勉強するというよりは、毎日リヤカーとシャベルでグランドの整備で5年生まで勉強したことがありませんでした(笑)。

5年のときに文教の幼稚園ができました。

この小学校の特徴は、八百屋、材木屋、酒屋など商人の子が多かったです。親は休みなしに忙しく、子どもを遊びに連れていくなんてことは全く無理でしたね。だから文教は、近くて面倒見の良い安心できる小学校という感じだったと思います。

当時は1学年に1クラスで自分たち1期生と次の2期生は１６人くらいでしたが、その後は1クラス２５人から３０人に増えました。同期１６人中、女子は5人くらいで、なんだか分校のようなのどかな雰囲気でした。

放課後、先生が夕方の4、5時まで面倒を見てくれて皆にかけそばをご馳走してくれたことは忘れられません。当時、先生のポケットマネーだったのでしょうね。

中学部は、女子だけはそのまま付属校の女子中学に上がれましたが、男子は、全員が他の中学受験をしなければなりませんでした。先生には放課後どころか、塾に通うような受験勉強までもお世話になりました。担任は1年から4年生は毎年代わっても、受験指導の5、6年の担任は代わりませんでした。

当時は、下高井戸に1校だけ進学専門予備校があり毎週、先生が連れていってくれました。これもすべて先生の個人的な教育の思いからだと思います。

おかげ様で受験のときは、自分なりに１００点を取れた自信があり、希望校に合格しました。男子は全員が東京や神奈川県の私立中に行き、公立に行った人はいません。皆、電車通学でした。

今でも、小学校の同期会は年に1、2回やりますよ。皆はまだ、この近辺に住んでいるので、この近隣で開きます。商売を続けているのはほんの2人くらいです。しかし、悲しいことにすでに、4人の同期が亡くなっています。

◆当時はどんな遊びがありましたか

近くの高津小学校の子どもたちとは、同級生同士ではありませんでしたが、当時は親分肌のガキ大将がいて年令、学校に関係なく遊んでくれました。ベーゴマや、竹の水鉄砲などで遊んだのが思い出です。

桃や梨畑に入って、袋が掛けてある実が興味津々で、その袋を破いては叱られました。もちろん、その場では食べずに甘くなるまで待ちました

よ(笑)。子どもが1、2個食べたってうるさく言われませんでした。昔は、今のような専門的な大掛かりな泥棒はいませんから、誰かが盗んで近辺で売っても、すぐわかってしまいました。

洗足学園の友だちに、梶ヶ谷の牧場主の子がいて、毎週日曜はよく遊びにいきました。子どもの足で30分、旧国道246をずっと歩いていきました。今のようなゲーム機はないし、野原を駆け回り、遊びの領域は広かったですね。

近くに光明寺がありますが、特にそこで遊んだ記憶はありません。

多摩川に関しては今、壊しているサンジェルマンの工場の前の川がちょっとした遊び場になっていました。4年生くらいのときに、そこの水辺に何かを浮かべると流れていきましたから、何か水流があったのかと思います。砂利の採取場があったし、そこで釣りもできたし、釣った魚を食べてた人もいたと思います。うちは、親から多摩川は危険だから遊んではいけないと言われてました。

◆当時の町の様子は

昭和30年代、多摩川の埋め立て地に、業者向け市場ができて、昭和50年頃までありました。北部市場の前身でしょうか。

二子新地の裏あたりは、三業地で昭和36年くらいまで遊郭がありました。橋のたもとにはダンスホールがあったようですが、物心ついたときには、もうありませんでした。でもなんとなく三業地の華やかさは覚えていますよ。川べりに船が出て、お酒を一杯やっている人々を土手の上から眺めてましたもの。お金持ちなんだろうなあという印象があります。この辺の人たちも参加していたんでしょうねえ。

土手の神社の鳥居の柱に「二子三業組合」と名前が書いてありますが、寄進の名残でしょうね。

◆町内会長を12年お務めですが

現在、10月はお祭り、親子運動会、11月は防災訓練、12月は餅つき大会、11月から12月にかけて公園掃除・落ち葉清掃などがあり、その他は子ども会の日帰りバス旅行会も行っています。

この年末の餅つき大会は200人の子どもたちと大人を合わせれば約400人以上が集まります。会場は、うちの駐車場がこのときとばかりは、お祭り広場に変わります。

この会場は、冬の区民祭である大山フィエスタでも盛り上がり、スタンプラリーの中継地点になったり、フランクフルト・ソーセージやかけうどんの模擬店が立ちます。

◆お祭りに関しては

高津区民祭は、交通規制のなどの条件でここに決めてから40年経ちます。昔はもっと商店があったので賑やかでした。

溝の口神社の宮司が、「久地、久本、御岳、新城、二子」など五箇所の神社を兼務しています。二子の祭りの日は、10月10日でしたが、6、7年前から10日をずらした休日にやるようになりました。

大人御輿は雨が降ったら中止ですが 、霧雨くらいなら決行です。子ども御輿は、大太鼓や山車もありますが、雨では子どもたちが風邪をひくといけないので、やりません。

町内会に子ども会があるのですが、うちの町内会には、7、80人くらいの子ども会のメンバーがいます。私が34歳で会長職にあった時には、

３００人いました。やはり、親が積極的にならないと子どもは参加しませんね。うちの子ども会は、親に抱かれた赤ちゃんから入会ＯＫです。遊びに興味を示すのは３、４歳からですからね。子どもは皆、平等ですから学区が違っても入会できます。会費は取りません。

うちの町内会では、子ども会を卒業した中学生たちも積極的ですよ。その子たちに声をかけると、町内対抗リレーや東日本大震災のときの復興支援の募金活動の手伝いや、市長選のときの手伝いもしてくれます。１回でも経験すると、またやってみたいと言ってくれます。選挙の日は、投票所に１日張り付いてくれました。

町内会の役員が年をとるといろいろと大変になってくるので、組織を見直すためにも世代交代は必要だと思います。子ども会の関係で若い人と繋がっていると、その親に声をかけやすいです。地域コミュニティーの繋がりが保てます。　二子の町内会の当番は、５年に１回まわってきます。各月に各町内会役員が集まって定例会を開きます。防災や有事のときに、顔がわからないと行動ができませんから。垣根を越えて、町内会の活性化を図っています。

◆７０年近くお住いですが何か一言

思い出してみても困ったなあということがなかったような気がします。商売を通して、人との繋がりが持てたことは、人生において実に、良かったなと思います。これからも「至誠一貫」という自分の信念を持って生きていきたいと思います。

（平成２５年１０月７日）